

グリーンツーリズムとふるさと回帰 県主催のシンポジウムで考える



たとえばペナルティ。うちでは、ノー政の言いなりにならないからペナルティってのを課されてきました。法律に違反するわけではないので、罰を科することはできないのですが、まあ似たようなものです。父の代からでしたが、課せられる本人には意味のわからないカタカナ言葉でした。

たとえばマニフェスト。「公約」って言葉は「違反」とセットでないと使えないような政治をやってきた自民党や公明党が、それをごまかすために飛びついたカタカナ語です。

たとえばモラルハザード。たとえばコンプライアンス。例をあげだしたらキリがないけど、だいたい行政がカタカナ言葉を使うときには何か後ろ暗い魂胆があるものだと思います。

*

さて本題。右上の切抜きは「北茨城市民報」の最新号です。県などが主催したシンポジウムについて報じています。

“早くから農家民宿を主催して多く人の交流を重ねてきた大分県の中山さんは、「ありのままの農家に来ていただくことが私のグリーンツーリズムです。孫や子に負債を残さない取り組みをしています」との話は印象的でした。”

と、おとなしい書き方だけど、でも紙面が許せば

“グリーンだブルーだといったのは10億円も5億円も税金をつぎ込んでハコモノを建て、その後も赤字の山を重ねているどっかの市長さんに聞かせてやりたい講演でした。”

と、記者は付け加えたかったんじゃないかなあ。

いっぽう逆の意味ですが、パネラーの一人でコンサルタント会社の代表の「まもなく定年を迎える団塊の世代のなかには、生活にゆとりがある人がいる。そのあたりを対象をしぼることも考えてはどうか」という発言も印象的でした。都会のヒマな金持ち以外は相手にするなという意味だよなあ。

首都圏から北茨城に移り住んだSさんは「じゃあお金のない人は癒やさ



れなくていいの？」と驚いていました。

グリーンツーリズムってのも、やっぱり行政のカタカナ言葉かあ。

*

今回のシンポジウムの看板には、「協力:ふるさと回帰支援センター」と記されていました。労働組合の「連合」が、農協中央に呼びかけて立ち上げたNPO法人だそうです。講演の合間に、事務局長さんがあいさつしました。

「いま日本では毎年3万人以上もの人が自殺している。こんな国は世界に類がない」

と切り出して、それはそのとおりなんだけど、ちょっと待ってよ。

そんな国づくりをすすめてきたのが小泉政治だったわけで、その首相を大会にまねいて「構造改革」のエールを交換したり大企業のリストラに積極的に寄り添ってきた労働組合の責任とか反省とか、ふるさと農村を破壊する農政の下請けとして手を貸してきた農協中央の責任とか反省とか、まるでふれないってのは納得がいかない。

これから団塊の世代がごっそり定年退職して生きがいと行き場を失う人があふれてくるから、農村は受け入れる準備をすすめよう。それで農村を活性化させよう。早い者勝ちだ。

って、仰ってたように聞こえたけど... そういう人たちの老後と次の世代の賃金をごっそり分捕って、史上空前の利益を上げている大企業の貯め込みも一緒に農村に向けさせなきゃあダメなんじゃないのかい。

タクシー会社の廃業で失業中というNさんも憤慨していました。

*

農村の働き手をみんな都会に集めて、その人たちが老いたら「ふるさと回帰」。もちろん真の意味でなら大賛成だけど、半面では姥捨て山を見つけてニンマリしてる輩もいそうだし...

カタカナ言葉も怪しいけど、このごろ市町村合併で流行のひらがな多用もなんだから...と、とてもたくさんの勉強ができたシンポジウムでした。